



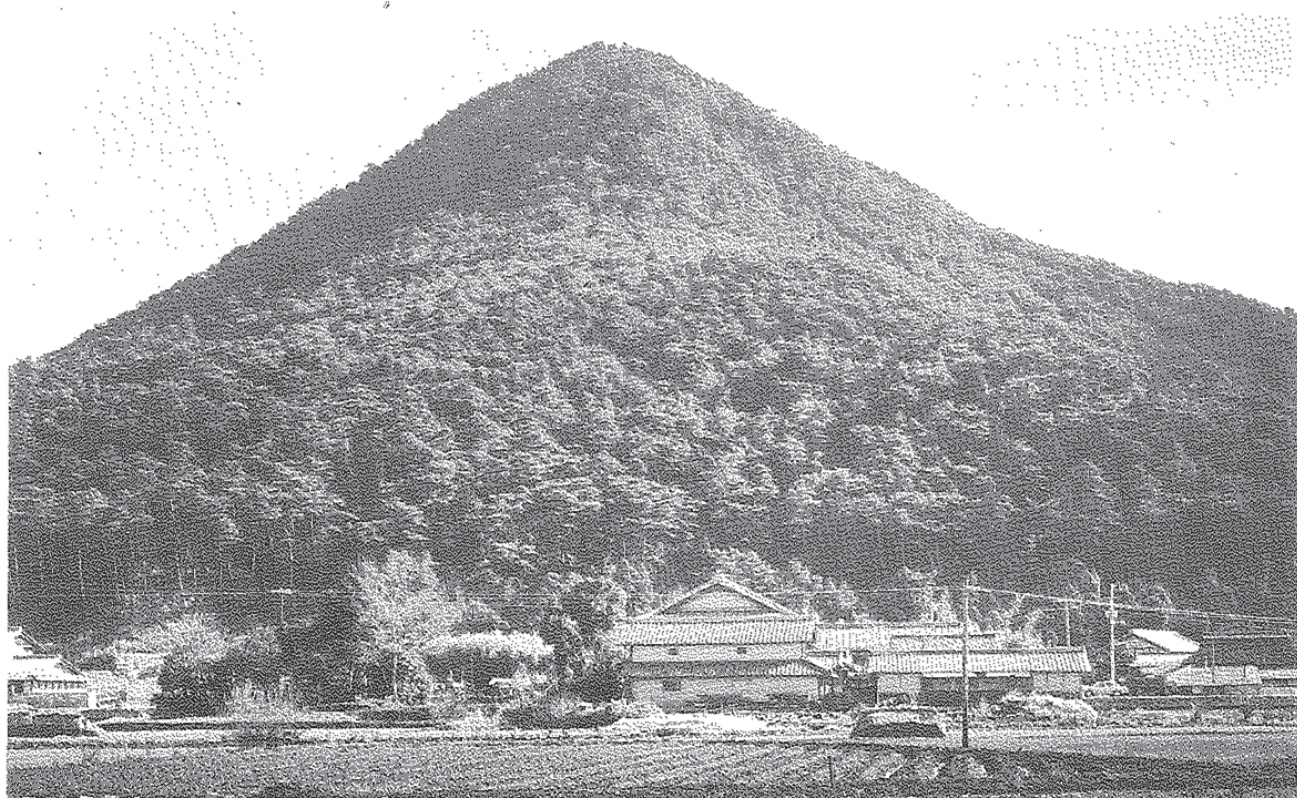
三上山と御上神社

神体山

美しい姿と青々とした林相をいつも示している三上山は、湖東平野における歴史の座標（いつも目じるしになる存在）だと考えています。日野川と野洲川とが永い間に造りあげた大きな沖積平野を見おろすように、その端然とした姿は鏡山の台地（洪積性山地）の突端にそびえています。標高は428メートルといますから、さして高い山ではありませんが、不思議と遠くからその独特の山容（山のすがた）が目に入ってきます。言いかえればこの山を扇の^{かた}要として、その西北一帯に広々とした平野がひろがっています。この平野が美味しい近江米を豊かに産出して来ました。日野川と野洲川の豊かな水量が、この平野を

うるおして来たわけですが、三上山はちょうど、その支点に立って、この平野における人々の生産のいとなみを見守っているように美しい姿をみせています。

このように、農耕平野の中心にあって、印象的な姿をみせる山を、昔から神体山と呼んでいます。古代の人々は、お米がとれるのも、不作になるのも、すべては自分達が祀っている神々の^{ついで}思し召しであると信じて来ました。雨が降らないで干天になやまされるのも、長雨がつづいて田や畑が流失するのも、すべては水を^{ついで}司る神々の配慮が大きく支配していると信じていました。三上山のような秀麗という言葉がいちばんよくあてはまる山に神を祀り、この山は自分達の集落の守り神であると



秀麗な山容の三上山（御神山）

前野隆資氏撮影

固く信じていました。春の植付けになるとかならず神々を耕作地に近い場所に迎えてまつり、秋の豊作が終わるとこの神々に感謝をささげてまた神体山へ送りかえして来ました。「としごい」と呼ばれる春のまつり、「にいなめ」と呼ばれる秋のまつりは、農耕者の真剣なところをよく現しているものだといえましょう。

みかみやま

三上山の神を祭る神社が御上山神社です。現在は山も社も野洲郡野洲町に在ります。まず野洲という文字が河川の沖積作用で出来た広びろとした平野という感じをもっています。古典に「近淡海国之安国造」と書かれる豪族たちの本拠地はこの辺りにあったとされ、このあたり一帯を「三上郷」という名で呼び、山出、東林寺、大中小路、稲端、前田、小中小路、妙光寺と七つの村々から成っていたとされています。これらの古郷には古墳も多くありますが、これは彼等の祖先を葬り、その靈魂をまた神として仰ぎ、その精霊の鎮まる所として、この美しい山を守って来たのだといえましょう。神体山と古墳とは古代信仰を形成する重要な二つの要素であった訳です。

みかみやまは、三上山、御上山、御神山、三神山、神影山などの文字を充てていますが、いずれも山を尊敬する心が表れていると思います。赤松の幹とそのみどりは、四季とりどりの美しさを現しますが、薄く雪をいただく初冬の山容を、わたしは国道からあまりにも神々しく眺めた思い出もあります。

三上山の山頂には巨大な岩石の露頭があり、これを磐座と呼んで、いまもここには奥宮（山宮）が祀られています。古代祭祀の時期にはおそらく全山が人々の入山を禁じられて、山麓から固く山の神聖が保たれ、山全体がいわゆる神籬（神のすまい）としてその清潔が保持されていたのでしょう。三上山の林相の美しさは、この山とその宗教とが生きつづけていることを物語っています。おそらく古代

においては、一定の祭祀の時期にだけ定められた司祭者（巫女）が、この山の頂上に籠り、その「神がかり」状態に達した時に、山頂から司祭者は神と共に山を降りてくる、これをいわゆる「みあれのまつり」と呼んでいます。みあれした神を麓の祭祀所（里宮）に祀り、そこに社殿が造られて御上山神社になったのだと思います。麓の社殿は山の神を迎えて祀る場所、そして秋の取り入れが終わると、豊作を感謝して再び神様は神体山にもどされる。日本の神社の祭りに、春の祭りや秋の祭りが多いのはそのゆえなのです。農耕の暦と神まつりの暦とは常に合致している訳です。

「みかみやま」という名称が「御神山」であり、山即神といった観念は、もっともよくこの名称のうえに表されていますし、祭神を天之御影神と呼ぶのも、まことにそうした自然神的な神の性格をよく現していると思います。山麓をめぐって古墳群が多いのは、古代における集落の支配者や主権者たちを葬った奥津城であり、山に籠る神霊はそうした祖先たちの「たましい」でもありました。

山の神をまつることはまた祖先たちの「たましい」への祭祀であり、鎮魂でもあると当時の人々は信じていました。自然神をまつる神体山信仰と人格神を敬慕する古墳祭祀とは、結局は一つの信仰体であったということになって来ます。だからこうした古代における神がみとは、呪力をもった精霊であり、これをまつる方法もきわめて呪術的なものであったと想像されています。春先に山から神を迎えて一年間の豊穰を祈る祈年祭と、秋にはそのみのりを感謝して神を山中へ送りかえす新嘗祭とは、いうならば古代の生活における通過儀礼でありました。そこにいきいきとした古代生活とのつながりが感じられ、三上山のみずみずしいみどりは、そのままが「山の生命」、また「神のいのち」の象徴でもあると考えられて来ます。そして社殿の固定化と共に霊力（精霊・スピリット）の神格化がはじまりま

す。それはまた自然神道から社殿神道へのうつりかわりであって、土俗的な信仰から神道的宗教への発展であったといふことができます。こうした日本の古代信仰がもっているもっとも標^{テイビカル}型的なものを、わたしたちはこの三上山信仰と御上神社において見いだすことができる訳です。

御上神社の神殿群

御上神社の社殿群はこうした信仰と歴史を物語るにふさわしい荘重な構えをもっています。特に本殿は国宝であり、拝殿と楼門と若宮神社とは重要文化財に指定されて、すぐれた神社建築の多い滋賀県においても、ひとときわ群を抜いた存在だといえましょう。

〔楼門〕 重要文化財に指定されている鎌倉時代の建物で、三^{さん}間一^{いつ}戸、二階造りの楼門になっています。屋根は入母屋造で、桧皮葺です。弘安三年(1280)という墨書銘が見出されています。桧の表皮をはいで、これを重ねて雨よけとする屋根の葺き方ですが、日本の上代の建物では、お寺には瓦を用い、ほかは一番上等がこの桧皮葺、それに柿^{かき}葺などが知



御上神社

本殿から拝殿と楼門をみる

られています。桧皮葺は見た目に風雅であり、いうならばいちばん日本的な建築美を発揮するものだといえましょう。しかし次第に材料も乏しくなるし、第一にこれを美しく葺きあげる技術者がだんだん少なくなって来ました。今後の文化財の保存には重大な問題の一つがここにもあるといえましょう。

〔拝殿〕 楼門の奥にあり本殿と一直線上に並んでいます。この建物も重要文化財に指定されています。屋根は楼門とおなじく入母屋造、桧皮葺です。構造形式は桁行三間、梁間三間^{はりまさんかん}というとおり、正面も側面も柱間が三つ（柱は4本ずつ）ということです。鎌倉時代の建物で、非常にゆったりとした、また軽やかな感じのする屋根の勾配^{こうはい}です。とくに珍しいのは内部を見上げると2本の大きな梁（虹梁^{にこうりやう}）を渡して屋根を架構していることです。天井は中央部を竿縁^{さおぶち}という普通の民家に見るような張り方で、その外まわりは化粧屋根裏になっています。これはもと本殿であったものを改造して拝殿にしたのだともいわれています。県下の多くの神社にみかける拝殿とはひと味ちがったものをもっています。

〔本殿〕 本殿は国宝になっています。構造形式は桁行三間、梁間三間、屋根は入母屋



御上神社の本殿

造の桧皮葺で、正面の一柱間分が向拝（シリーズ20を参照）になっています。棟の上に置千木と勝勇木があるので、いっそう神殿らしさを加えています。正面と左右には勾欄を付けた回廊をめぐるしていますが、この回廊の束柱の礎石には蓮弁を刻んでおり、その一つに建武四年(1337)の年号があります。しかしこの年号が本殿の建築年号であるかどうかは研究を要するところです。わたくしは、建物はもう少し古いのではないかと考えています。近よってみると神殿というよりも、簡素で住宅風の親しめる雰囲気を感じさせます。内部は中央の柱間一間分を内陣とし、床もここは一段と高くなっています。ここに御神体を納めた厨子がありますが、この厨子は宝形造、板葺きで、本殿と併せてやはり国宝です。また内陣の後方を板で仕切って、後室が設けられていますが、仏殿の影響が少しはこのあたりにも見いだせるように思います。

〔若宮神社と三宮神社〕 いずれも末社ですが本殿に向かって左にあるのが若宮です。一間社流造の小さな社殿ですが、屋根は桧皮葺、鎌倉時代末の建物で、正面の向拝に美しい髷股がみえます。この建物も重要文化財になっています。

三宮神社は本殿に向かって右に建っているやはり同様の小さな社殿で、構造形式はほとんど若宮と変わりませんが、室町時代の建物で、県の指定文化財になっています。

〔すもう人形〕 この神社に大変に珍しい「すもう人形」があります。小さなもので人物像の高さは20cmくらい、力士は一つの材でとり組みとなり、行司は別になっています。

むかしから農耕の豊凶を占うために、神社ですもうをとってその勝ち負けで、豊作か不作かを占う方法や、神前で綱引きをしてその勝負をもって占う方法など、農耕に関する民俗や風習はいろいろ残されています。むかしは宮中でも力士を召し集めて、国の公事として「すもう占い」が毎年7月28日（旧暦）に



木造相撲人形 御上神社所蔵

行われていました。これを「相撲の節会」と呼んで年中行事になっていました。またある神社では一人ずもうというのがあり、力士1人が行司の前ですもうをとり、その力士が負けると行司の軍配はもう1人の姿なき力士の方にあがるのです。これは神様とすもうをとっている訳で、勝てるはずはありません。このように年占のすもうや綱引きの勝敗は、はじめから定まっているので、定め通りに勝つから占は豊作ときまっている訳ですが、やはり農耕にける庶民の切ない願望といったものが、こうした神事の形となっているゆえんでしょう。御上神社のこの人形1組もそうした習わしに用いられた一種の神像であったのです。すもう人形はささやかな文化財（県指定工芸品）ですが、そうした人々のこころの表現としてみていただきたいと思います。

御上神社にはこのほか重要文化財の狛犬が1対（鎌倉時代）と、応永年間の銘文がある狛犬1対があります。

（景山春樹氏提供）